

## よりよい教育・研究環境の整備を目指して

環境保全本部担当常務理事 中村純 1

### 2013年度 大学評価結果(経営部門) 2~3

### シリーズ「学士力の質保証を考える」対談(第6回): 生き生きと幅広く学び、論理的・批判的思考を

大学評価室長 八名和夫 × スポーツ健康学部長 山本浩 4

### 第3回 法政卒業生大学評価アンケートの結果から 5

活動報告／編集後記 6



環境保全本部担当常務理事  
中村 純

### MESSAGE 1

## よりよい教育・研究環境の整備を目指して

「自由と進歩」を標榜する法政大学は理念・目的を掲げて教育・研究の質保証に努め、着々とその成果を挙げつつある。大学基準協会の認証評価において高い評価を得ることができたのも総長、担当理事はもとより、各教授会それぞれの努力の賜物と言えよう。自己点検・評価活動のよりいっそうの活性化は今後も重要な意味を持つであろう。

教育と研究は大学の顔である。しかしまた大学は装置産業ともいわれる。研究・教育の質向上のためにはその環境を整えることもまた重要な使命である。振り返ってみるとわが大学はこれまで必ずしも計画的に施設面の整備を進めてきたともいいにくいところがあったのではない。勢い必要に迫られてもはや放置し得ない部分から否応なしに建替えたり、改修したりに追われることに

なりがちであったように思う。施設面を担当するものとしてはいささか困った事態と言わざるを得ない。そうした反省に立って3キャンパスの全てにわたるLCC計画を策定し改善を試みたものの、多摩キャンパス以外のところでは残念ながら財政上の理由からいまだ実施に至っていない。資金計画も含めて実現可能な計画を模索し、継続的な施設整備を進めていかねばならない。数十年に一度という大事業なら、小金井キャンパス再開発はすでに2011年にほぼ完了し、市ヶ谷キャンパスの55・58年館の建替え計画も着々と進行している。この機を逃さず長期展望を見通したLCC計画に基づいた点検・評価活動に臨み、継続的に教育・研究の質向上に資する施設整備を目指して着実に歩を進めていきたい。

## 2013年度 大学評価結果（経営部門）

### 大学評価委員会経営部会の評価結果から

2013年度の大学評価委員会経営部会（外部学識経験者4名で構成）は、「法政大学のビジョン主要項目—あるべき姿と定量的目標」の進捗状況および、2012年度大学評価委員会経営部会指摘事項への対応状況について、書面ならびに総長をはじめとする役員等とのインタビューに基づき評価を行いました。

同報告書より本学への提言部分について、一部抜粋して掲載します（全文は大学評価室ホームページに掲載しています）。

### I 「法政大学のビジョン主要項目—あるべき姿と定量的目標」の進捗状況について

#### 1. 「自立的で人間力豊かなリーダーを育成」するためのビジョン

大学全体で3つのポリシーを策定し、それに基づいて学部・大学院ごとにそれぞれのポリシーを策定しているものの、質保証委員会の活動にばらつきがあることは、大学全体の責任にもかかわる課題であると思われる。また、科目のナンバリングや実質的なセメスター制の実現も全学的な課題となる。

#### 2. 「最先端の研究を促進」するためのビジョン

大学院の体制整備については、いくつかの目標が検討または準備の段階であり具体的成果は出ていない。現状の常務理事による業務執行体制では、大学院整備の推進は困難との判断から、新たな制度のもとでの取り組みに向けて、総長から理事会に対し大学院担当副学長制の導入が提案されている。各々の目標への着手は、大学院担当副学長の制度発足後と考えられ、現状、当該項目は「まだ達成できていない」と評価せざるを得ない。

特定課題研究所の増加は、足踏み状態であり2014年度の目標年度に向けて定量的目標の達成が危ぶまれる。科研費獲得は、段階的に達成に向けて尽力しているものの、当該項目としては「達成が不十分」と評価する。

#### 3. 「持続可能な地球社会の実現に貢献」するためのビジョン

「持続可能性教育の重視」という主要項目については、人間環境学部や地域開発等のプログラムを持っている一部の部局を除くと、各学部の現況は、「独自のカリキュラムの整備・公表」という段階には至っていない。

「環境・持続可能性を軸とした政策立案・提言の促進」について、これからの政策立案やシンポジウム等の開催に関しては、中央環境審議会の議を経て内閣府が示している戦略目標などの諸課題を参考にし、貴大学が保有している人的資源や研究実績をもとにしたプロジェクト研究を活性化させ、その成果を基盤としたインパクトのある内容のものでなければならない。

「研究成果を教育・社会に還元するための条件整備」については、学術研究データベースへの入力、紀要類を学術機関リポジトリで公開する等の研究成果の公表に関する定量的目標は、公教育機関としての大学としての基本的な要件であり、2018年を待つまでもなく、本来ならば直ちに達成されるべき性格のものである。

持続可能な地球社会の実現に貢献することを大学のビジョンとして掲げた貴学の姿勢は未来社会への責任を積極的に果たそうとする意思のあらわれとして大いに評価できる。しかし、現段階は、まだ緒に就いたばかりであり、「まだ達成できていない」と判断せざるを得ない。

#### 4. 法政大学が短中期的に取り組むべき、その他の主要項目

「卒業生・在学生・保護者との連携（オレンジネットワーク）強化」について、法政オレンジキャンパスカード会員の獲得はオレンジネットワークの象徴でもあり、かつ大学資金支援の有効な仕組みともいえるが、目標の6割弱であることから、当該項目については、「まだ達成できていない」と評価せざるを得ない。

「付属校改革による、ステージ校戦略の展開」について、卒業後の状況の資料化に関しては、二中高が卒業生の名簿作成に着手しているものの、他校は資料化の方法も含めて今後の課題としている。

3 キャンパスの充実について、LCC計画の実施によるキャンパスの充実を目標に掲げたことは、学校法人として極めて健全であり、ステークホルダーに対しても説得的である。学校法人は目先の決算があるわけではないので、長期的構想の中でLCC計画が策定実施されることが望まれる。その意味で、LCC計画の開始が先送りされたことは、理由はともあれ当該事項については「まだ達成できていない」と評価せざるを得ない。

## 5. 事務職員集団の計画的な育成について

これからの大学経営においては、事務職員は、大学運営のプロフェッショナルとして、主体性を持って政策の企画、立案、調整に参画し、経営陣をしっかりと支えていくことが求められる。

学務や研究支援、財務や経理等のスペシャリストを育てるだけでなく、各キャンパスを異動しながらジェネラリストとして育ていく幹部職員も必要である。その育成には、全学的な視点に立って、長い時間をかけた計画的・継続的な取り組みが必要であることを強調しておきたい。

## II 2012年度大学評価委員会経営部会指摘事項への対応状況について

### 1. 法政大学のビジョン主要項目—あるべき姿と定量的目標について

「大学院の戦略目標」や「高度で最先端の研究体制づくり」は、我が国の大学院を取り巻く環境や競合する他大学の研究動向とも関係している。「何が貴学の特長であるか」「リーディング・ユニバーシティとしての存在価値はどこにあるのか」、根拠データをもとにして、もう一度、このことを全学で確認する必要があるように思う。

### 2. 科研費補助金、寄付金等外部資金の獲得について

研究所の運営について、科研費はもとより、様々な国の研究補助金、さらには受託研究などの資金等官民合わせの様々な資金に幅広く目配せし、資金獲得に努めることが求められる。

中長期の経営計画・事業計画がないまま財政確保だけが進められている状況をして、法人全体の進むべき方向性が示されない現状は健全なのかどうかという点については、「法人として中長期で立案した経営計画・事業計画が財政試算とリンクできるように検討したい」とのことであり、現状は「まだ、達成できていない」と評価せざるを得ない。

### 3. 学生生活支援・キャリア支援に関する取り組みについて

大規模大学の場合、大学そのものになかなかコミットしてこない学生は一定数存在する。ピアサポートなどはこの数を減少させるためにも有効である。この取り組みに加えて、学生相談室の業務も重要である。今後も多様な学生の「居場所」作りが行われることを期待したい。

修学支援については、留学生、特にアジア圏からの留学生の修学支援やキャンパスライフ充実への支援とともに、キャリア支援という観点からも対応策を検討することが必要であろう。

発達障がい学生への支援として、この分野での専門スタッフの確保とともに、なによりも当事者からの声を受け止め、ニーズを満たしていくシステム作りが必要となってくるであろう。

卒業生との協働については、大学の伝統の確認に加えて、変容し、改革していく大学に関する情報のきめ細かい提供があってこそ実現されることから、新たな組織へ提供される大学からの情報提供ツールの企画立案の必要性を付言しておきたい。

### 4. 学部・大学院における重点目標について

昨年度の経営部会の指摘に対し、教育支援本部担当の浜村彰常務理事からの対応案が報告されている。この報告によれば、貴学の執行部は、経営部会の指摘に誠実に応えようと努力しているものと認められる。今後も、昨年度の指摘事項を踏まえつつ、大学評価活動の実質化を更に進めていくことを期待する。

## シリーズ「学士力の質保証を考える」対談（第6回）： 生き生きと幅広く学び、論理的・批判的思考を

八名 和夫 [大学評価室長] × 山本 浩 [スポーツ健康学部長]

各学部における教育の質保証に向けた取り組み・成果について、大学評価室長と学部長との対談形式でお伝えするシリーズ。今回は、本学で最も新しく設置されたスポーツ健康学部の山本浩学部長にお話を伺いました。

### ＋のびのびとした教育環境と学生・教員の密なコミュニケーション



八名大学評価室長

**八名** 2012年度に完成年度を迎え、これまでの総括を行ったのではないかと思います。

**山本** 教員志望の学生が予想以上に多いこと、また、ヘルスデザイン・スポーツビジネス・スポーツコーチングの3コースに学生が偏りなく所属することがわかりました。そのためカリキュラム改革を行い、教職系の科目を強化したり体制を整備したりしました。

スポーツ健康学部は文系と見られがちですが、数学・数理学を要求されるスポーツサイエンスの要素が強いのです。実習系科目が多く、被験者を使った少人数教育を行うため、学生との会話が自然に生まれます。教員研究室には頻りに学生が訪れています。設置から4年経過しましたが、学生と教員との距離が近い学部だと改めて実感しました。

**八名** 大学評価室の新生・卒業生アンケート調査結果では、学生から高い大学満足度、学部満足度を得ていますね。

**山本** 教員との密なコミュニケーションに加え、学部の専門分野に必要な広い立地空間・施設設備があり、体を動かす教育内容が学生の自律神経の働きをうまくバランスさせていることが要因ではないかと思います。

### ＋「専門知識習熟度テスト」の実施

**八名** 「専門知識習熟度テスト」を実施し、教育成果の検証を行っているとのことでした。概要を教えてください。

**山本** 年度の初めに新2年生・3年生を大教室に集めてテストを実施しています。前学年の必修科目の内容から設問されるため、学年によって内容が違います。問題作成にあたっては、担当教員が5問ずつ提案したものを調整し、基礎的専門知識の問題を50問設置しています。受験率は100%で、学生には個人の得点、順位をフィードバックしています。

**八名** テストの結果は教授会で共有していますか。

**山本** 点数のばらつきを見て次年度の設問に生かすような議論を内部でしています。今後は、学生のバックグラウンドや所属コース等を加味した分析を行い、教育体制やカリキュラム



専門知識習熟度テスト

に生かしていければと思っています。

### ＋独自の教育課程が産み出す学生の自発的な学びあい

**八名** 他学部の参考となる優れた取り組みだと思います。その他、特色ある教育などはありますか。

**山本** 部活等でプレー経験を持つ学生には、トレーナーやコーチの希望者が少なくありません。そのために実習室を準備しました。実習室は空き時間にも開放しますし、担当教官の下で学生と学生が教えあう状況が自然に生まれています。

**八名** 最近、アクティヴラーニングなど、学生が主体的に学ぶ必要性が謳われていますが、それが身近な日常の場で行われている。専用食堂によるカロリー管理もそうですが、それぞれの仕掛けが歯車としてうまく回っている感じがします。インターンシップも盛んですね。

**山本** サッカークラブや球団、スポーツクラブ、介護施設など多くのインターンシップがあります。ボランティアにも積極的に、スポーツ祭東京のボランティアには58名もの学生が参加したんですよ。

### ＋小さな事象を見逃さない眼が生む幅広い知識

**八名** 学生の高いモチベーションがわかります。今後の課題はありますか。

**山本** スポーツの世界では語学力が求められますので、米国夏季研修の内容を発展させるなど英語の強化を検討しています。また、取得資格が学生のキャリアに直結しづらい状況があるので、関係省庁に粘り強く働きかけたいと考えています。学生には、スポーツで養われる方法論やタイムマネジメントスキル、リハビリ能力等を論理的に意識して汎用化するとともに、就職先の状況を洞察・分析する力を養うよう指導しています。



山本スポーツ健康学部長

複雑化した現代社会では、学問と学問の間で様々なことが起きると思うのです。学生には、細分化された1つの専門の世界に思考を留めることなく、その周辺にある小さな事象にも関心を持ち、自身に問いかけ、想像力を持って幅広く学んでほしい。そのために教員は常に研究室の扉を開いています。

**八名** 学部の優れた取り組みがよくわかりました。本日はありがとうございました。

## 第3回 法政卒業生大学評価アンケートの結果から

年度比較を中心に

大学評価室では、2013年7月から9月にかけて、2003年3月および2010年3月の学部卒業生を対象に、アンケート調査を実施しました。今回が3回目の実施となります。その結果を一部抜粋して報告します。

[有効回答数：2003年3月卒 272件(回収率7.9%)、2010年3月卒 394件(回収率：8.5%)]

### I 法政大学および入学学部に対する満足度

図1：法政大学に対する満足度 (%)

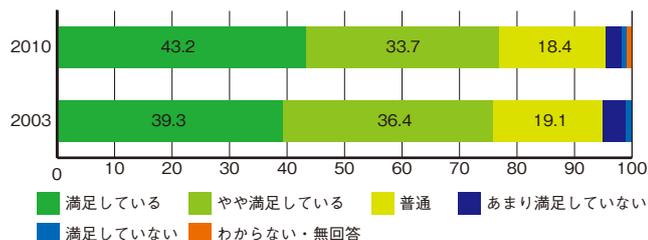
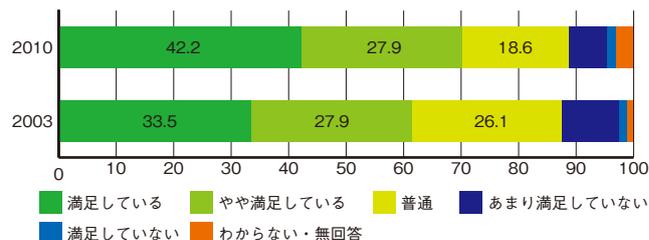


図2：入学学部に対する満足度 全学 (%)



大学の満足度(「満足している」と「やや満足している」の合計、以下同様)、学部満足度のどちらも2010卒が高くなっています。

### II 大学での授業や活動を通して身につけた能力

図3：2003卒 身につけることができたと感じる能力 (%)

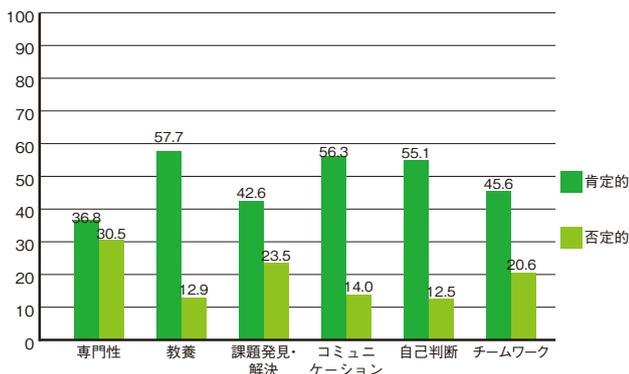
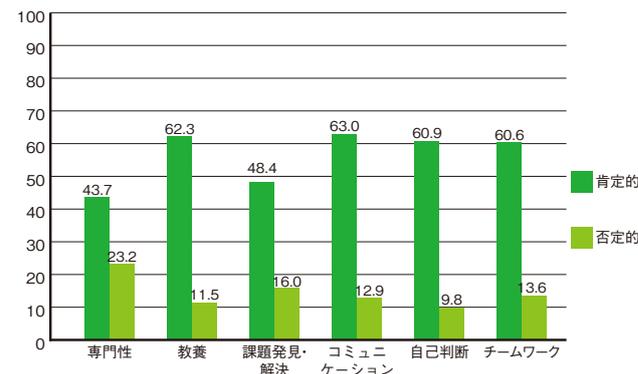


図4：2010卒 身につけることができたと感じる能力 (%)



肯定的回答では、2003卒では「教養」(57.7%)が最も高く、「専門性」(36.8%)が低くなっています。2010卒では、「コミュニケーション力」(63.0%)が最も高く、「専門性」(43.7%)が低くなっています。全体としては2003卒・2010卒ともに同じような傾向となっています。

### III 本学が今後さらに充実すべき点

図5：本学が今後さらに充実すべき点 (全体)



教養を高めるための教育(385件)が最も多く、専門性を高めるための教育、英語力を高めるための教育と続く。保護者アンケートで最も回答が多かった就職支援は5番目となっています。

アンケートの詳細については、大学評価室ホームページに掲載しています。



## 第2回自己点検委員会を開催しました。

2014年1月16日(木)に、2013年度第2回目となる自己点検委員会が開催され、2013年度自己点検・評価活動の総括および規程の一部改正などが審議されました。



## 第14回大学評価室セミナーを開催しました。

日時：2013年11月28日(木) 13:00~14:30

場所：九段校舎3階 第1会議室

科学技術・学術政策研究所 総務研究官の齋藤尚樹氏をお招きし、「博士級人材の育成及びキャリアパス開拓—高度専門人材の多様化・グローバル化とその育成に向けて—」を開催しました。各種詳細なデータをもとに、海外との比較を交えながら若手研究人材を取り巻く環境、育成・支援、博士級人材データベースの構築などについてご講演いただきました。



## 第15回大学評価室セミナーを開催しました。

日時：2014年1月16日(木) 13:30~15:00

場所：九段校舎3階 第1会議室

関西学院大学大学院社会学研究科委員長・社会学部長の荻野昌弘氏をお招きし、「関西学院大学大学院社会学研究科におけるソーシャルリサーチ教育の取り組み」をテーマにご講演いただきました。大学院入学から専任教員へのプロセスや学位取得のプロセスなど具体的な取り組み内容をご紹介いただき、本学関係者にとって大変有益なものとなりました。



## 保護者アンケートを実施しました。

12月から1月上旬にかけて、学部在学生の保護者の方2000名を対象にしたアンケート調査を実施しました。結果については大学評価室ホームページに掲載する予定です。

編集  
後記

毎日寒い日が続いておりますが、みなさんは体調を崩されたりはしていませんか？いよいよ今年も入試の時期となりました。今回初めて地域入試の担当となり、1週間ほど福岡に出張することになりました。ミスの無いように運営に努めたいと思います。また入試期間と同時期にはソチオリンピックも開催されます。本学関係者をはじめ、出場される日本代表のみなさんの活躍を期待したいですね。

(坂本)

